

従属節の配置に見る読者との対話

『カンタベリ物語』の最終話「牧師の話」をめぐって

家入 葉子

キーワード 従属節、語順、コミュニケーション、ジェフリー・チョーサー、
「牧師の話」

本章の概要と
方法論について 本章では、14世紀の作家ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer、1340?–1400年) の作品『カンタベリ物語』(*The Canterbury Tales*) の最終話「牧師の話」("The Parson's Tale") を題材に、従属節の位置に、人間の認知やコミュニケーションにかかわる動機づけが働いていることを明らかにする。「牧師の話」は比較的長く、チョーサーでは数少ない散文作品(冒頭の一部は韻文)の1つである。したがって、語順研究には最適であるといえよう。

語順と認知およびコミュニケーションの関係は、現代英語では広く研究されているテーマである。従属節の位置に関しても、たとえば Diessel (2001、2005) など先行研究も多い。しかし、過去に書かれた文献を扱う研究となると、その数はそれほど多くはない。初期近代英語については Claridge and Walker (2001) や Claridge (2007) があるが、条件節や理由節に限定的で、従属節全体を見渡すものではない。一方、Iyeiri (2013) は15世紀の書簡の分析を行い、人間の認知やコミュニケーションのあり方には、時代を超えた共通点があるという結論に至った。本章では、書簡とは異なる物語文学を取り上げ、人間のコミュニケーションへの動機づけがジャンルや時代を超えて従属節の配置に反映されることを明らかにする。

歴史語用論と本章で扱う語順の考え方

語用論の詳細な定義は、本書の序論に譲ることとするが、その扱うところは多様である。Sperber and Wilson (2012: 1) は、その著書の冒頭で、語用論を広く解釈した場合の定義として、まず以下のように述べている。

しばしば語用論は、言語の構造ではなく言語の運用を明らかにする研究であるとされる。この広い意味では、語用論は関連性がゆるいさまざまな研究プログラムを包括することになる。たとえば、直示表現の形式的研究もそうであるし、民族固有の言葉のステレオタイプを扱う社会学的研究も、この領域に入ることになる¹。

このあと Sperber and Wilson (2001) が解釈する狭い意味での定義が続くが、本章では便宜的に語用論を広く解釈してみることにする。語用論が言語の構造よりもその運用に焦点を当てたアプローチであるとするならば、本章で扱う語順を含め、あらゆる言語現象が、その対象となるはずである。現代英語の場合には、特に談話においてコミュニケーションの多様な側面が表出しやすいため、話しことばを対象に語用論研究が行われることが多い。しかしながら、言語の構造だけでは説明できないさまざまな特徴が実際の言語使用に現われることは、書きことばも同じである。関心が一旦書きことばに広がると、その対象が歴史的文献にまで広がり、歴史語用論という分野が生まれてくる（あるいはその存在が意識され始める）のは、ある意味で必然といってもよい。

言語は話しことばであれ書きことばであれ、本質的にはコミュニケーションを目的とするものであり、一見したところ語りの方向が一方的であるように見える書きことばにおいても、この点は同様である。近年になってから分野として確立してきた感のある歴史語用論ではあるが、その考え方そのものは伝統的に行われてきた文学作品の言語研究の1つの展開のあり方として見ることもできるはずである。本章で扱う物語文学についても、コミュニケーションの視点

をその分析に応用しようという考え方は、必ずしも新しいものではない。Jacobs and Jucker (1995: 9) は、「文学作品もコミュニケーション行為として分析されてきた (Literary texts, too, have been analysed as communicative acts)」と述べ、チャールズ・ディケンズの小説を「作家と読者」という視点から分析した Watts (1981) や、チャーサー作品を読者との関係で分析した Sell (1985a, 1985b) に言及する。このように考えると、歴史語用論とは、すでに史的文献について行われてきたこれまでの分析方法を、語用論という軸を使って再整理する分野であるといってもよさそうである²。本章の研究も、この考え方をよりどころとするものである。

文学作品を著者と読者のコミュニケーションであるとする見方が以前より存在するのと同様に、語順をコミュニケーションの視点から分析する研究も、新しいものではない。その多くが、必ずしも「語用論」(まして「歴史的語用論」という用語を使用してはいないかもしれないが、語順が情報の伝達のあり方と密接に関係していることは、すでに多くの研究者が気づいているところである。もっともよく知られた考え方の1つは、文がテーマ (トピック) となる情報とそれを発展させるコメントからなり、情報の文中での配置がこの流れをそのまま反映することが多いというものである。一般に topic と comment、あるいは theme と rheme などの用語を使って説明される情報の流れで、今日ではもはや古典的ではあるが、言語の構造よりも運用に焦点が置かれた考え方であるという意味で、今日ならば語用論や認知的な視点から発展させることも可能な見方である。

一方で、語用論という用語を積極的に用いた語順研究、特に史的研究の事例としては、Bech (1998) を挙げることができる。Bech は冒頭のパラグラフで、語用論がどちらかといえば話しことばに重点をおいてきたものの、史的文献にも応用されるようになってきたこと、さらには歴史語用論という新たな分野の出現にも言及する (p. 79)。Bech (1998) の議論の興味深いところは、英語における語順の変化という言語の構造にかかわる部分に、情報の重さという語用論的な要素を関連づけたことである。より具体的には、動詞を文の第2位置に置く古英語の XVS 語順が中英語期にかけて XSV の語順 (現代英語の語順) に変化する過程を、主語や動詞の情報量とともに整理することで説明した。

言語の構造よりも運用に焦点を当てるとするのは語用論の定義そのものであるが、一方で、両者の間には関連性も存在する。Hopper and Thompson (1993: 358) は、文法を考える際にも人間の言語活動という視点が無視できない点を、以下のように表現している。

文法がどのようにしてその形になるのかを理解しようとし、また言語の運用と文法のダイナミックな相互作用を考えると、文法は人々がことばを話すパターンに従って形成されるという結論に行きついてしまう。つまり、談話的事実を考慮しなければならぬのである³。

実際近年は、英語の語順の変化をもっぱら言語の構造の視点から論じてきた研究者の多くが、コミュニケーションの視点に立った言語変換理論を試みている。Nevalainen and Traugott (2012) が編集する *The Oxford Handbook of the History of English* には、Taylor and Pintzuk (2012) など、この方向の論考が多数収められている。

人間の認知やコミュニケーションにかかわる動機づけには、時代や言語の違いを超えた共通部分が多い。一方で、言語は生きた言語である限り、常に変化の可能性を有している。両者がどのように折り合いをつけるかが、歴史語用論理解の鍵となろう。本章では、従属節の位置という現代英語では広く研究された領域を中英語文学作品に応用することにより、どちらかといえば、時代や言語の違いを超えた共通部分に焦点をあてる試みを行う。

従属節の文中での位置を扱った語順研究は近年注目されている分野の一つであるが、その多くは現代英語を扱うものである。たとえば Diessel (2005) は、従属節の位置はその意味機能によって傾向が異なるとし、「従属節＋主節」の順がもっとも好まれるのは条件

節、次に時の従属節、そして次に理由の従属節であるとする。この際に Diessel (2005) が扱った従属節は、条件節ではifによって導かれるもの、時の従属節ではwhen、while、after、before、once、until、since、as、as soon as、as long asによって導かれるもの、理由の従属節ではbecause、since、asによって導かれるものである。

一方で、英語の史的文献については、同様の研究はそれほど多いとはいえない。Claridge and Walker (2001: 45-49) が初期近代英語の理由節の位置、Claridge (2007: 244-252) が同じく初期近代英語の条件節の位置について研究を行っているが、それぞれに完結しており、異なる種類の従属節を互いに比較する研究は行われていない。本章では、異なる性質の従属節間の比較を行うため、Diessel (2005) に近い枠組みで調査を行ったIyeiri (2013) を参考にすることにしたい。Iyeiri (2013) は15世紀のノーフォーク方言で書かれた『パストン家書簡集』(*Paston Letters*)⁴を分析の対象としており、時代的にも本章で扱う『カンタベリ物語』に近い。Iyeiri (2013) は、Diesselと同様に時制をもつ従属節のみを扱い⁵、従属節を導く接続詞については中英語テキストの実態に合わせて、if、though (although)、when、because (by cause)、till (until) (以下、中英語については、すべての異綴りを含む) の5種類に絞っている。分析結果は、おおむねDiessel (2005) 等の研究を支持するもので、15世紀書簡においても、条件節は主節の前に起こる傾向が強く、この傾向は時の従属節では弱まり、理由の従属節ではさらに弱くなる。また、扱う従属接続詞を限定したことにより、従属節の種類によるさらなる違いを浮き彫りにすることが可能となり、時を表す従属節でもwhenに比べてtill (until) 節は、主節の後に置かれる傾向が強いことなどが明らかになった。また、Iyeiri (2013) はDiessel (2005) が扱っていないthough (although) を扱い、譲歩を表すこの従属節が条件節に続いて主節の前に置かれる傾向が強いことも示した。本章でもif、though、when、because (実際はすべてby cause)、tillの5つの接続詞に導かれた節を分析の対象とする (althoughとuntilの例はない)⁶。また、先行研究では主節に先行する従属節をinitial、主節の後に置かれる従属節をfinalとすることが多い。本章では、これに加えて主節中に挿入される従属節をmedialとし、initial、medial、finalの3つの位置について見ていくことにする。

これも、Iyeiri (2013) の枠組みに従うものである。ただし、『パストン家書簡集』のような書簡では読者が特定されているのに対し、本章で扱う物語文学では、同様に著者から読者への情報伝達、すなわちコミュニケーションが想定されるものの、読者は不特定多数である。両者の間にどの程度の一致が見られるかは興味深いところである⁷。

3

「牧師の話」における従属節

3.1

従属節の種類と文中での位置

本節では、分析の対象とする *if*, *though*, *when*, *because* (*by cause*), *till* に導かれた従属節の配置について全般的な傾向を見る。以下は、扱う従属節の具体例である（本章における「牧師の話」の引用は Benson (1987) から、「牧師の話」の例文の日本語訳は梶井 (1995) による。斜字体は筆者）。

- (1) And *if* so be that the lawe compelle yow to swere, thanne rule yow after the lawe of God in youre swerying... (592)
〔もしも法律によってやむを得ず誓言をするようなことがあるのなら、その誓言においては神の法に従って行いなさい。〕
- (2) God woot that *though* the visages of somme of hem seme ful chaast and debonaire, yet notifie they in hire array of atyr likerousnesse and pride. (430)
〔彼女らのある者たちは一見顔を見ると、とても貞淑で優しいように見えるけれども、彼女らは衣服を着飾って好色と高慢とを示していることは、神様をご存じです。〕
- (3) The especes that sourden of Pride, soothly *whan* they sourden of malice ymagined, avised, and forncast, or elles of usage, been deedly synnes, it is no doute. (448)

〔高慢から生じる種々の罪は、本当に、それが前もって考えられ、熟慮された悪意から、またあるいは、習慣から生じる時には大罪です。それには疑う余地がありません。〕

- (4) *by cause that they been married, al is good ynough, as thynketh to hem.* (905)

〔結婚しているのだから万事これでいいのだと彼らは考えているのです。〕

- (5) *For soothly, no wight that excuseth hym wilfully of his synne may nat been delivered of his synne til that he mekely biknoweth his synne.* (586)

〔というのは確かに、誰も意図的に自分の罪の言い訳をする者は自分の罪から解放されることはできないのです。その人が自分の罪を素直に認めるまでは。〕

(1) では、andがifに先行しているが、andのような文の主要要素でないものは考慮から外して、(1) は従属節が主節に先行するinitialの例とする。(2) では、thoughによる譲歩節とそれを受けたyetで始まる主節が共にthat節内に収められている。この場合も、当該の従属節とその主節の順を見ることとし、(1) と同様にinitialの例であると考え。次の(3) は、従属節が主節内に挿入されているのでmedialの例、(4) は従属節が主節に先行するのでinitialの例、(5) は主節の後に従属節が起こるのでfinalの例である。

以上のような基準で「牧師の話」における従属節を整理すると、該当例は199で、その生起位置は、図1ようになる。

図1が示す通り、becauseとtillはきわめて頻度が低く（それぞれ2例と7例）、分析に不適のようにも見える。しかしtillでは、7例

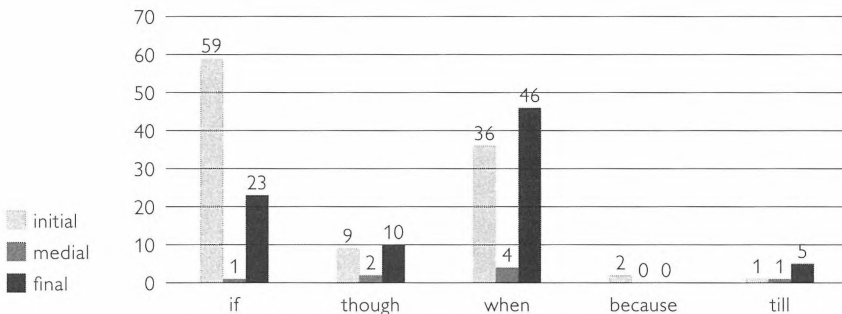


図1 「牧師の話」における従属節の位置（絶対頻度）

のうちの5例がfinalの例となっていて、その傾向は明白である。すなわち、tillに導かれた従属節は、主節の後に置かれるのが一般的だといえそうである。15世紀の『パストン家書簡集』を調査したIyeiri (2013) でもtill (until) に導かれた従属節は主節の後に置かれる傾向がきわめて強く、224の該当例のうち215例(96%)がfinalであるという結果が得られていることから、この傾向は確かなものであると考えられる。Diessel (2005) は、when節やtill節を時の副詞節として同列に扱っているが、図1およびIyeiri (2013) の分析から、両者の間には傾向の差異があるといつてよい。さらに、その他の接続詞も含めて主節に先行する傾向が強いものから順番に並べる(becauseは2例なので除外9)と、(a) ifの条件節、(b) thoughの譲歩節、(c) whenによる時の副詞節、(d) tillによる時の副詞節の順になる。この順序は『パストン家書簡集』の結果と完全に一致している(Iyeiri 2013: 216-220)。なお、図1のmedialの例、すなわち従属節が主節内に挿入されている例は、どの従属節でも頻度は低い。

このように著者もジャンルも異なる「牧師の話」と『パストン家書簡集』とで完全一致の結果が得られたことは、きわめて興味深い。参考までに、議論の枠組みは異なるが、初期近代英語の条件節を調査したClaridge (2007: 244-252) も、ifの条件節は主節の前にくる傾向があるとしており、ifについて一致する結果を示している。おそらく、話し手と聞き手、書き手と読み手のようなさまざまな対人関係に共通の「円滑なコミュニケーションのあり方」が存在し、人は無意識の配慮をしながら、言語の機能を最大化する言語行動を取っているのだろう。

もっともわかりやすいのは、tillによって導かれた従属節である。Whenによる節との違いは、同じ時の副詞節でもtillによる節は、主節との関係において明確な前後関係がある点である。Till節が主節の後に置かれる傾向が際立っているのは、現実世界における出来事の前後関係が、そのまま言語上の前後関係に映し出されているという要因が大きいからであろう。現代英語の語用論研究ではすでに古典的となったGrice (1989: 24-31) は、会話を円滑に進めるための「協調の原則」(Cooperative Principle)を提唱し、4つの公理(maxim)をもって説明する。その1つに「様態の公理」(maxim of

manner) があり、会話を円滑に進めるためには、様態にもしかるべきあり方があるという。「順序立てて話すこと」(Be orderly) はその1つである。Griceの「協調の原則」は会話に特化したものであるため英語史上の文献を扱う際にはほとんど使用されてこなかったが、物語も著者と読者のコミュニケーションの一形態であると考えたと、その本質的に意味するところは利用可能であるはずである。順序立てて相手に提示するというのは、話の内容を順序立てることはもちろんであるが、文中での情報の配置にもいえることであり、円滑な伝達には、話し手や書き手が意識しているかどうかは別として、このメカニズムが働いている可能性が高い。副詞節の多くは、主節の前に置いても後に置いても、命題の意味を変更することはない。しかしながら、tillのように現実世界において明確な前後関係が存在するものには、情報の流れという観点から、より効率的な配置があるものと考えられる。

このように現実世界での出来事の順序がそのまま言語に反映されるという傾向は、機能主義的な言語分析においても、しばしば指摘されてきた。若干の例をあげると、Altenberg (1987: 56-58) は談話を組み立てる際には順序についての動機づけが働くとして、その1つにnatural ordering、すなわち現実世界の順序をそのまま反映させる傾向があるという。同様にGivón (1991: 92) も現実世界と言語の対応関係に着目し、両者の間に働くさまざまな原則の1つにsemantic principle of linear orderをあげ、流れのよい談話では、「表現されている出来事が実際に起こった時間の順序 (the temporal order of the occurrence of the depicted events)」が言語に反映されるという¹⁰。

一方、ifによる条件節、thoughによる譲歩節、becauseによる理由節の位置については、現実世界との対応というよりも論理関係の働きが大きいとを感じる。再びGrice (1989) の「協調の原則」に戻ると、様態の公理は「不明瞭、あいまいさを避けよ (avoid obscurity, avoid ambiguity)」ともいう。Ifによる条件節は主節の命題が真となるかどうかを左右する前提条件であるため、聞き手や読者に早めに提示し、不必要な誤解を避けることが望ましい。現実世界との対応関係はtillの場合ほど明確ではないが、条件節と主節との間にはやはり論理的な順が存在する。このことが、「条件節+主節」

の語順を促進しているのだろう¹¹。

一方Haiman (1978) は、その論文のタイトル (“Conditionals are Topics”) が示す通り、条件節は一種のトピック、つまりテーマであると考える。情報の伝達がテーマからそのテーマについてのコメントへと展開していくことは、すでに述べたように、多くの研究が認めるところである。この見方もまた、ifによる条件節が主節に先行する傾向を裏打ちするものである。先にも言及したAltenbergは、natural orderの他にもthematic orderを提唱しており、if節の典型的な語順は、Altenbergの枠組みにも合致する。このように、if節は文法的には主節の前にも後にも置くことができるはずであるが、実際には主節の前に起こる傾向がきわめて強く、これは多分にコミュニケーション上の動機づけによるものであると結論づけることができる。

その他の接続詞については、tillやifほど強い傾向は見られない。たとえばthoughは、主節の後に置かれることが若干多いようであるが、前に置かれるか後に置かれるかに大差がない。また、そもそも「牧師の話」では該当例がそれほど多くないという問題がある。譲歩節も主節の内容に先立つという意味においては広く前提と捉えることができるかもしれないが、ifのように条件ではないので、主節の内容が実現するための前提としての働きは必ずしも大きいとはいえない。このため主節の前に置かれる傾向が、ifほど強くはないのだろう。いいかえれば、後から付加的に追加することも可能な情報である。

最後に、理由を表すbecause節にも触れておきたい。残念ながら「牧師の話」ではbecause節はわずかに2例であるので、その傾向をつかむことはできない。しかし、Iyeiri (2013) が調査した『パストン家書簡集』では、because節が主節の後にくる強い傾向が観察された (84%が主節の後)。初期近代英語を扱ったClaridge and Walker (2001: 45-49) でも、同様の結果が出ている。因果関係についていえば、理由が主節の内容に先行するはずである。それにもかかわらずbecause節が主節に後続する強い傾向を示すのは、多くの場合に理由が付加的であり、情報として重要なのは主節の内容が実現した、という事実に他ならないからであろうか。また場合によっては、別の見方も可能である。理由はある意味で情報として重

い。本来ならば主節の内容が実現したという事実だけで十分なはずだが、理由を述べた時点で、今度は理由の方に焦点が当たることになる。逆に主節の内容が前提となり、それを説明するのがbecause節であるという情報構造が出来上がるのかもしれない。その他にも、becauseは本来by causeの前置詞句であるから、文中の前置詞句が生起しやすい位置に生起する傾向があるという説明も可能であろう。ただし、Diessel (2005) の調査によれば、理由を表す副詞節が主節の後ろに置かれる傾向は、becauseが十分に文法化した現代英語でも同様であるので、やはり情報構造のようなものが、少なくとも一定程度は働いていると考えるのが自然であろう。

3.2

従属節の文中での配置と情報量

—

これまで、「牧師の話」を分析の対象としながら、情報伝達の機能性を最大化するという動機づけが従属節の配置にどのように関連しているかを論じてきた。扱ってきたのは主に、現実世界と言語との関係、および言語情報どうしの論理的関係である。これに対して本節では、情報の重さ自体を議論の対象とする。先に述べたBech (1998) は、まさにこの点に焦点を当てた研究である。ただしBech (1998) が古英語から中英語という広い時代を扱い、マクロな視点にたって英語の語順の変化と情報量の大小を論じたのに対し、本章では、特定の接続詞に導かれた従属節と主節の位置関係という限定された領域に焦点を当てることで、より詳細な分析を試みる。

分析にあたってBech (1998) は、主語が旧情報を担っているか新情報を担っているか、動詞が本質的に小さい情報量を担う動詞であるか大きな情報量を担う動詞であるか、など複数の基準を駆使して情報の重さを定義づけている。しかしながら「牧師の話」では、調査の対象としている従属節のうち、そもそも情報量と語順の分析に耐え得ると思われる頻度を示すのは、if節とwhen節だけだといってよい(図1参照)。これらも必ずしも複雑な分析に耐えるだけのデータ量を提供しないので、指標を単純化し、語数が少ない従属節を情報量が少ない従属節、語数が多い従属節を情報量が多い従属節として議論を進めることにする。これは、情報量と語数が連動

するという考え方によるものである。ちなみに Givón (1991: 87–89) は、「量の原則」(The quantity principle) として、「情報量が多い場合には、言語的にも多くのコードが与えられる (A large chunk of information will be given a larger chunk of code)」としている。基準は Iyeiri (2013) の『パストン家書簡集』での分析方法に従い、接続詞も含めて5語以内の従属節を「短い」従属節、それ以外を「長い」従属節とみなす。この段階で、「短い」従属節を20以上提供するのはifの条件節とwhenの時を表す節だけとなるので、以下の分析では、この2つに焦点を当てる。

以上の基準に基づいて「牧師の話」におけるif節とwhen節を分析すると、次の表のような結果を得ることができた。

	initial	medial	final	合計
if 節	7 (35.0 %)	1 (5.0 %)	12 (60.0 %)	20
when 節	7 (33.3 %)	1 (4.8 %)	13 (61.9 %)	21

表1 「牧師の話」における「短い」if節とwhen節の位置（「短い」従属節）

	initial	medial	final	合計
if 節	59 (71.1 %)	1 (1.2 %)	23 (27.7 %)	83
when 節	36 (41.9 %)	4 (4.7 %)	46 (54.5 %)	86

表2 「牧師の話」におけるif節とwhen節の位置（すべての該当例）

比較的例が多い条件のif節と時を表すwhen節に限定しても、例が若干少ないという印象は残る。しかしながら、表1と表2を比較することで一定の傾向をつかむことは可能である。どちらのタイプの従属節についても、「短い」場合には主節に後続する傾向が強まるようである。この傾向は特にifの条件節で顕著であり、if節はまた、主節中に挿入されるmedialの比率も増加する。ただし、medialについてはifもwhenもそもそも該当例が少なく、「短い」従属節に限定した場合の増加も該当例がたまたま「短い」従属節であったという印象を否めない。参考までに、ifの「短い」従属節を以下に示す。

(6) And right so as contricion availleth noght withouten sad purpos

of shrifte, *if* man have oportunittee, right so litel worth is shrifte
or satisfaccioun withouten contricioun. (310)

〔機会がある限り、変わらぬ気持で告解することなしには、悔恨は役に立たないのと同じように、ちょうどそのように、告解も、あるいは贖罪も悔恨なしには価値がないのです。〕

このように「牧師の話」だけを見る限りは、その結果に対する確信度がやや低いといわざるをえないが、Iyeiri (2013) で行った『パストン家書簡集』と組み合わせることで、その確信度を高めることができる。『パストン家書簡集』でも、*if*の条件節と *when*による時の副詞節は、「短い」場合に限定すると、主節の後に配置される傾向が強まり、いずれの従属節においても medial の比率が高くなる。さらに medial の比率の高まりがより顕著なのは、*if*の条件節である。増加の度合い等の細かい点を除けば、2つのテキストの傾向は、ほぼ完全一致といってよい。全体の傾向(3.1節)において、2つのテキストの傾向が一致していたのと同じである。特に全体の傾向と従属節が「短い」場合の落差が大きい *if*の条件節についていえば、おそらく「短い」ものは積極的な前提というよりも付加的な情報として提示されるタイプのものであろう。主節中に従属節が挿入されるのは、その典型であるともいえる。短い従属節の挿入であれば、主節の情報の流れを大きく妨げることもなく、むしろよい意味での緊張感を文に与える効果が期待できる。これとの関連で、Ramsay (1987: 395–396) が、*if*節が主節の前に置かれる場合と後ろに置かれる場合では、そのスコープが異なるとし、前に置かれる方がその影響が及ぶ範囲が広いと考える点は興味深い。文全体に対する *if*節の役割が変わってくるからである。一般には、英語では重い情報ほど文の後半に置かれる傾向が強いとされるが、主節と従属節の関係では、互いに異なる機能を担っているので、この一般的な法則が当てはまるとは限らないと考えてよさそうである¹²。

結び

以上、チャーサーの『カンタベリ物語』の最終話「牧師の話」を題材に、従属節の配置がコミュニケーションにおける情報の流れとどのように連動しているかを見てきた。従属節の位置が従属節の意味機能によって異なることは現代英語については比較的よく研究されている。多くの場合に、その解釈には機能主義的な見方が使われるが、書きことばも話しことばと同様に読者を想定したコミュニケーションであると考え、語用論的な解釈も可能であろう。また両者は相互に関係した分析方法であり、語用論であるかそうでないかを論じること自体、意味がないのかもしれない。本章では、コミュニケーションのメカニズムを軸に中英語と現代英語の連続性、書きことばと話しことばの連続性を探る試みを行った。またIyeiri (2013) の『パストン家書簡集』との比較は、特定された読者に宛てて綴られた書簡と不特定多数の読者を想定した物語文学との間にとどの程度の共通性が見られるかを観察するために行ったものである。本章の分析では、両者の間には驚くほどの一致が見られ、またその多くは、現代英語の談話のフレームワークによっても説明できるものであることがわかった。

語用論はどちらかといえば話しことばを対象としながら、現代英語研究を中心に広く行われている研究分野である。しかしながら、コミュニケーションが言語の本質であるという視点に立った場合には、現代英語研究を中心に蓄積されてきた語用論の成果を、史的文献の研究においても応用していく余地が十分にあると考えてよさそうである。その際に、時代や社会の個別性に焦点を当てることも重要であるが、時代や社会の枠組みを超えた普遍性を示しながらも、なお運用としての側面を明確に示す事例もある。歴史語用論が得意とする多様な言語活動への関心を重視しながら、一方で言語変化を記述する際の軸を拡散させてしまわないためには、両者への十分な配慮が必要であると考え。

注

- 1 特に断らない限り、本稿の引用文の日本語訳は筆者による。この箇所の原文は、
"Pragmatics is often described as the study of language use, as opposed to language structure. In this broad sense, it covers a variety of loosely related research programmes ranging from formal studies of deictic expressions to sociological studies of ethnic verbal stereotypes".
- 2 歴史語用論の詳細な定義や分野の確立にかかわる経緯は、本書の序論に譲るが、Jucker (2008: 895) は、歴史語用論を広い意味で捉えたと、過去の人間の言語活動について、「当時の社会状況の中で人々が意図的にかかわり合いをもったときのパターン、そのパターンの史的变化、そしてその変化の背景にある一般的原則を理解しようとする分野 (a field of study that wants to understand the patterns of intentional human interaction (as determined by the conditions of society) of earlier periods, the historical developments of these patterns, and the general principles underlying such developments)」であると説明している。
- 3 原文は、"In trying to understand how grammars come to be the way they are, and in considering the dynamic interplay between language use and grammar, we are led inescapably to the conclusion that grammars are shaped by patterns in the way people talk; in other words, the facts of discourse must be taken into account".
- 4 パストン家が数世代にわたって書き残した書簡は、歴史的価値にとどまらず、言語資料としての価値も高い。書簡の著者と宛先が明らかで、女性の著者も含まれていることから、歴史社会言語学的研究に利用されることも多い (e.g. Bergs 2005)。
- 5 Diessel (2005) は、広く解釈した場合には、*After scoring over my calmness in this graphic way he nodded wisely* (Diessel (2005: 451) より引用、下線も Diessel) のように時制がないものも従属節とする考え方があるとしながらも、実際には、時制があるもののみを分析の対象としている。
- 6 Ifでは条件節のみを分析の対象とし、「〜かどうか」の意味で名詞節を導く従属節は扱わない。Thoughでは、譲歩節のみを対象とし、as thoughは分析から外す。理由を表す接続詞はbecauseの他にも多数存在するが、多くは意味が多義的すぎることを考慮し、Iyeiri (2013) に従って、本研究でもbecauseのみを扱う。ただし、理由を表す他の接続詞についても今後の課題としては考えていく必要はあろう。Claridge and Walker (2001: 40-41) がasの意味の特定が必ずしも容易ではないことに言及している点も参照。
- 7 Diessel (1996) は英語とドイツ語の共通性を指摘している。本章で扱う語順については、時代や言語の違いを超えた人間のコミュニケーションにかかわる普遍性のようなものが存在している可能性が高い。
- 8 以下の例では、this concupiscenceをitで受け直しているが、この場合も従属節が挿入される形になるので、medialの例とした。

And this concupiscence, whan it is wrongfully disposed or ordeyned in man, it maketh hym coveite, by coveitise of flesh, fleshly synne, by sighte of his eyen as to erthely thynges, and eek coveitise of hynesse by pride of herte. (336)

〔この肉体の欲望は、それが人の内に過った支配と秩序をとるとき、肉の強い欲望によって肉の罪を願わせ、目の感覚によってこの世のものを願わせ、

心の高慢によって高い地位を冀わせるのです。〕

- 9 Becauseは該当例が2例のみであるばかりでなく、2例ともby cause thatの形で起こる。「牧師の話」ではまだ、by causeが「前置詞＋名詞」であるという感覚が強く、十分に接続詞としての文法化が進んでいない可能性もある。
- 10 機能主義と語用論の関係については、Leech (1983: Chapter 3) を参照。
- 11 現実世界における前後関係と論理的な前後関係との切り分けは、必ずしも容易ではない。実際Givón (1991: 93) は、原因と結果の関係として、If he comes, we'll do it (逆順のWe'll do it if he comesは頻度が低い) をあげているが、この場合には現実世界においてもhe comesという出来事がwe'll do itに先立つので、現実世界の順序を反映しているともいえる。
- 12 ただし、Ford and Thompson (1986: 360–361) のように主節の後に配置されるif節が長い傾向があるとする研究もある。したがって、「長い」「短い」をどのように定義するかによって結果が異なってくる可能性もある。おそらくどの指摘も正しく、長さの定義の仕方によって言語の異なる側面の観察をすることになるのであろう。本章での定義は、結果として従属節の「付加性」に焦点を当てることになった。

また本章では扱わないが、thoughによる譲歩節については、長い譲歩節の方が主節の後に置かれる傾向があることが『パストン家書簡集』の分析からわかっている (Iyeiri 2013: 221–223)。Though節はif節に比べるとそもそも前提性が低く、また、長いthough節を主節の前に配置することは情報の軽快な流れを妨げることが要因なのかもしれない。

参考文献

- ・ 梶井迪夫 訳 (1995) 『完訳 カンタベリー物語』(下) 岩波書店
- ・ ALTENBERG, BENGT. (1987) Clausal Ordering Strategies in English Conversation. In James Monaghan (ed.) *Grammar in the Construction of Texts*, pp. 50–64. London: Frances Pinter.
- ・ BECH, KRISTIN. (1998) Pragmatic Factors in Language Change: XVS and XSV clauses in Old and Middle English. *Folia Linguistica Historica* 19: pp. 79–102.
- ・ BENSON, LARRY D. (gen ed.) (1987) *The Riverside Chaucer*. Third edition. Boston: Houghton Mifflin.
- ・ BERGS, ALEXANDER. (2005) *Social Networks and Historical Sociolinguistics: Studies in morphosyntactic variation in the Paston Letters, 1421–1503*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- ・ CLARIDGE, CLAUDIA. (2007) Conditionals in Early Modern English Texts. In Ursula Lenker and Anneli Meurman-Solin (eds.) *Connectives in the History of English*, pp. 229–254. Amsterdam: John Benjamins.
- ・ CLARIDGE, CLAUDIA, and TERRY WALKER. (2001) Causal Clauses in Written and Speech-related Genres in Early Modern English. *ICAME Journal* 25: pp. 31–64.
- ・ DIESSEL, HOLGER. (1996) Processing Factors of Pre- and Postposed Adverbial Clauses. In Jan Johnson, Matthew L. Juge, and Jeri L. Moxley (eds.) *Proceedings of the Twenty-Second Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, February 16–19,*

- 1996, pp. 71–82. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- DIESSEL, HOLGER. (2001) The Ordering Distribution of Main and Adverbial Clauses: A typological study. *Language* 77: pp. 433–455.
 - DIESSEL, HOLGER. (2005) Competing Motivations for the Ordering of Main and Adverbial Clauses. *Linguistics* 43: pp. 449–470.
 - FORD, CECILIA E., and SANDRA A. THOMPSON. (1986) Conditionals in Discourse: A text-based study from English. In Elizabeth C. Traugott, Alice T. Meulen, Judy S. Reilly, and Charles A. Ferguson (eds.) *On Conditionals*, pp. 353–372. Cambridge: Cambridge University Press.
 - GIVÓN, TALMY. (1991) Isomorphism in the Grammatical Code: Cognitive and biological considerations. *Studies in Language* 15: pp. 85–114.
 - GRICE, PAUL. (1989) *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
 - HAIMAN, JOHN. (1978) Conditionals are Topics. *Language* 54: pp. 564–589.
 - HOPPER, PAUL J., and SANDRA A. THOMPSON. (1993) Language Universals, Discourse Pragmatics, and Semantics. *Language Sciences* 15: pp. 357–376.
 - IYEIRI, YOKO. (2013) The Positioning of Adverbial Clauses in the *Paston Letters*. In Andreas H. Jucker, Daniela Landert, Annina Seiler, and Nicole Studer-Joho (eds.) *Meaning in the History of English: Words and texts in context*, pp. 211–229. Amsterdam: John Benjamins.
 - JACOBS, ANDREAS, and ANDREAS H. JUCKER. (1995) The Historical Perspective in Pragmatics. In Andreas H. Jucker (ed.) *Historical Pragmatics: Pragmatic developments in the history of English*, pp. 3–33. Amsterdam: John Benjamins.
 - JUCKER, ANDREAS H. (2008) Historical Pragmatics. *Language and Linguistics Compass* 2(5): pp. 894–906.
 - LEECH, GEOFFREY N. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
 - NEVALAINEN, TERTTU, and ELIZABETH C. TRAUGOTT. (2012) *The Oxford Handbook of English*. Oxford: Oxford University Press.
 - RAMSAY, VIOLETA. (1987) The Functional Distribution of Preposed and Postposed “If” and “When” Clauses in Written Discourse. In Russell S. Tomlin (ed.) *Coherence and Grounding in Discourse: Outcome of a symposium, Eugene, Oregon, June 1984*, pp. 383–408. Amsterdam: John Benjamins.
 - SELL, ROGER D. (1985a) Tellability and Politeness in “The Miller’s Tale”: First steps in literary pragmatics. *English Studies* 66 (6): pp. 496–512.
 - SELL, ROGER D. (1985b) Politeness in Chaucer: Suggestions towards a methodology of pragmatic stylistics. *Studia Neophilologica* 57: pp. 175–185.
 - SPERBER, DAN, and DEIRDRE WILSON. (2012) Introduction: Pragmatics. In Deirdre Wilson and Dan Sperber *Meaning and Relevance*, pp. 1–27. Cambridge: Cambridge University Press.
 - TAYLOR, ANN, and SUSAN PINTZUK. (2012) Rethinking the OV/VO Alternation in Old English: The effect of complexity, grammatical weight, and information structure. In Terttu Nevalainen and Elizabeth C. Traugott (eds.) *The Oxford Handbook*

of English, pp. 835–845. Oxford: Oxford University Press.

- WATTS, RICHARD J. (1981). *The Pragmalinguistic Analysis of Narrative Texts: Narrative co-operation in Charles Dickens's "Hard Times"*. Tübingen: G. Narr.

文献解題

- ANDREAS H. JUCKER and IRMA TAAVITSAINEN. (2013) *English Historical Pragmatics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

エディンバラ大学出版局のテキストブック・シリーズの一冊として出版された入門書で、歴史語用論をデータや方法論の観点から概観した部分と、ケーススタディとの組み合わせによって構成されている。第1-3章の概説は、歴史語用論の流れと実態を過不足なく整理した簡潔な記述となっており、歴史語用論をこれから始めようとする読者には、ありがたい一冊である。

- LAUREL J. BRINTON. (1996) *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and discourse functions*. Berlin: Mouton de Gruyter.

著者が得意とする文法化理論を交えながら、談話標識を扱った著作。タイトルからはわかりにくいですが、議論の中では、hwæt、gan、bifelなど、古英語・中英語に特徴的に見られる項目が多数取り上げられている。談話標識についての論考が多いなかで、英語史的な視点から同テーマを扱ったものとなると、やはり本書がその代表となるだろう。

- TERTTU NEVALAINEN and HELENA RAUMOLIN-BRUNBERG. (2003) *Historical Sociolinguistics: Language change in Tudor and Stuart England*. London: Pearson Education. (2nd ed. London: Routledge (2017).)

歴史社会言語学分野の古典的著作の1つである。著者自身が構築にかかわったコーパス、Corpus of Early English Correspondenceの分析結果を示しながら、歴史社会言語学の基本概念を紹介し、歴史社会言語学の全体像をつかむことができるよう工夫されている。動詞の三人称単数現在語尾の-thと-sや助動詞doの拡大など、伝統的な英語史でも必ず取り上げられてきた問題に焦点を当てながら、そこに「社会」という視点を導入することで、新たな展開が可能となることを具体的に示す。